



船場地区に新設する学校について

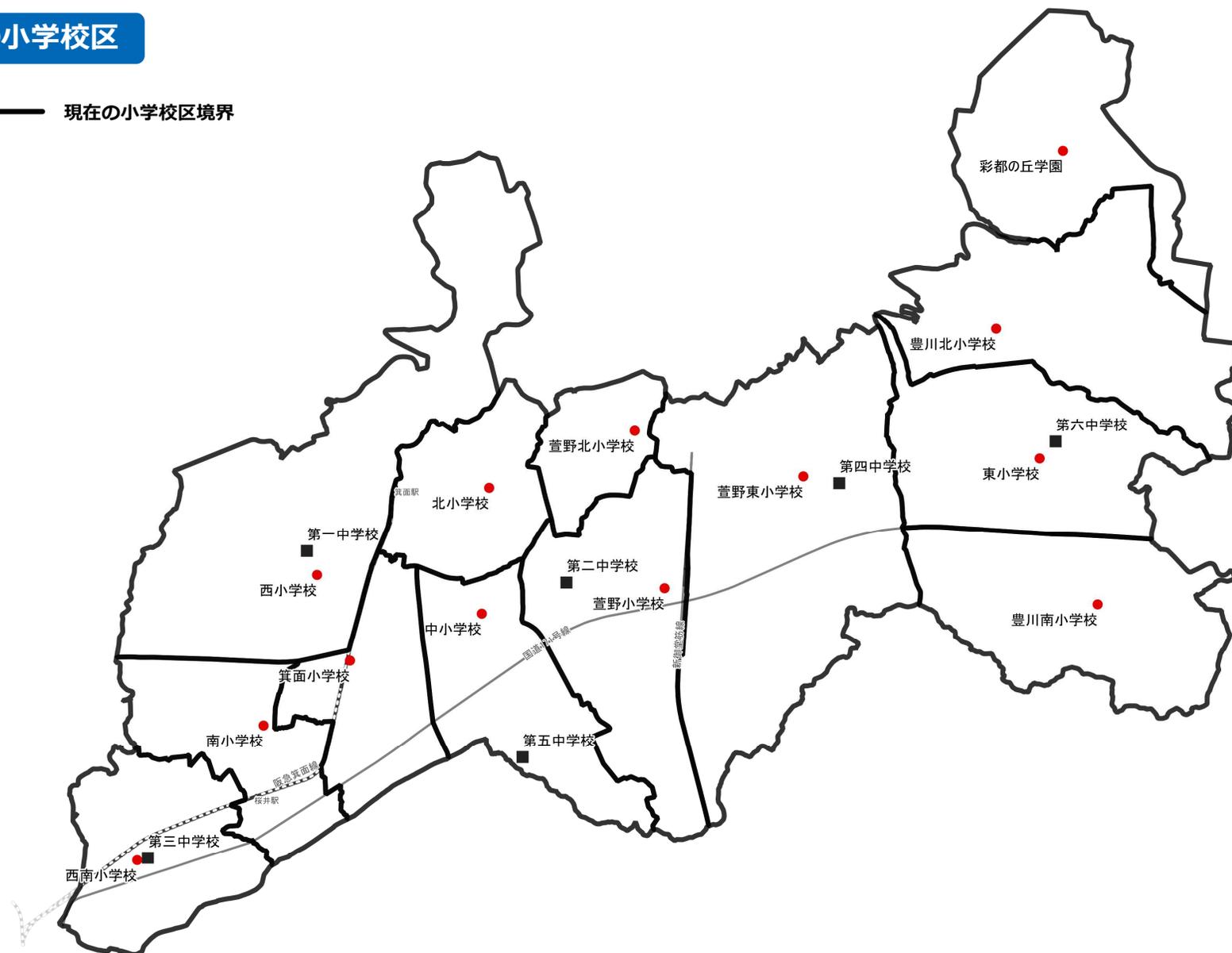
1. おさらい

余白

1. おさらい

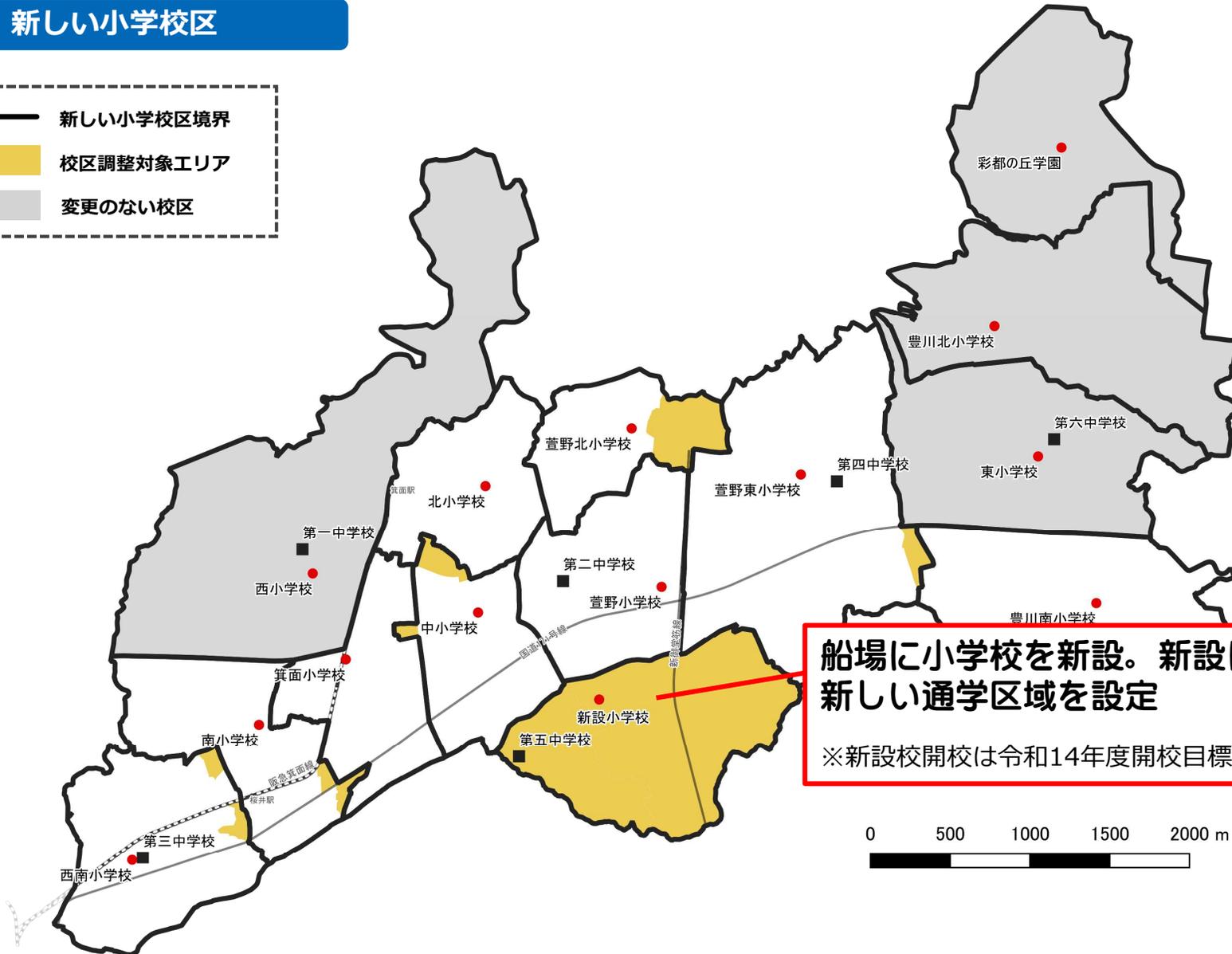
現在の小学校区

—— 現在の小学校区境界



1. おさらい

新しい小学校区



船場に小学校を新設。新設に併せて新しい通学区域を設定

※新設校開校は令和14年度開校目標

1. おさらい

過去に「新設校は小学校」と決定した理由

船場の新設校が小中一貫校だと・・・

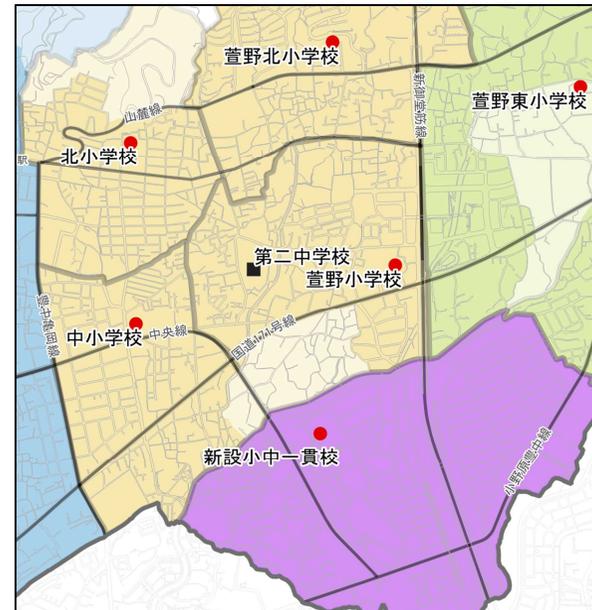
既存の第五中学校との併存が困難



第五中学校と併存しない場合でも・・・

第二中学校区（黄色エリア）が4小1中の状態になることから、中学校区内の連携がとりづらくなる。

※箕面市内は多くの中学校区で2小1中の組み合わせ



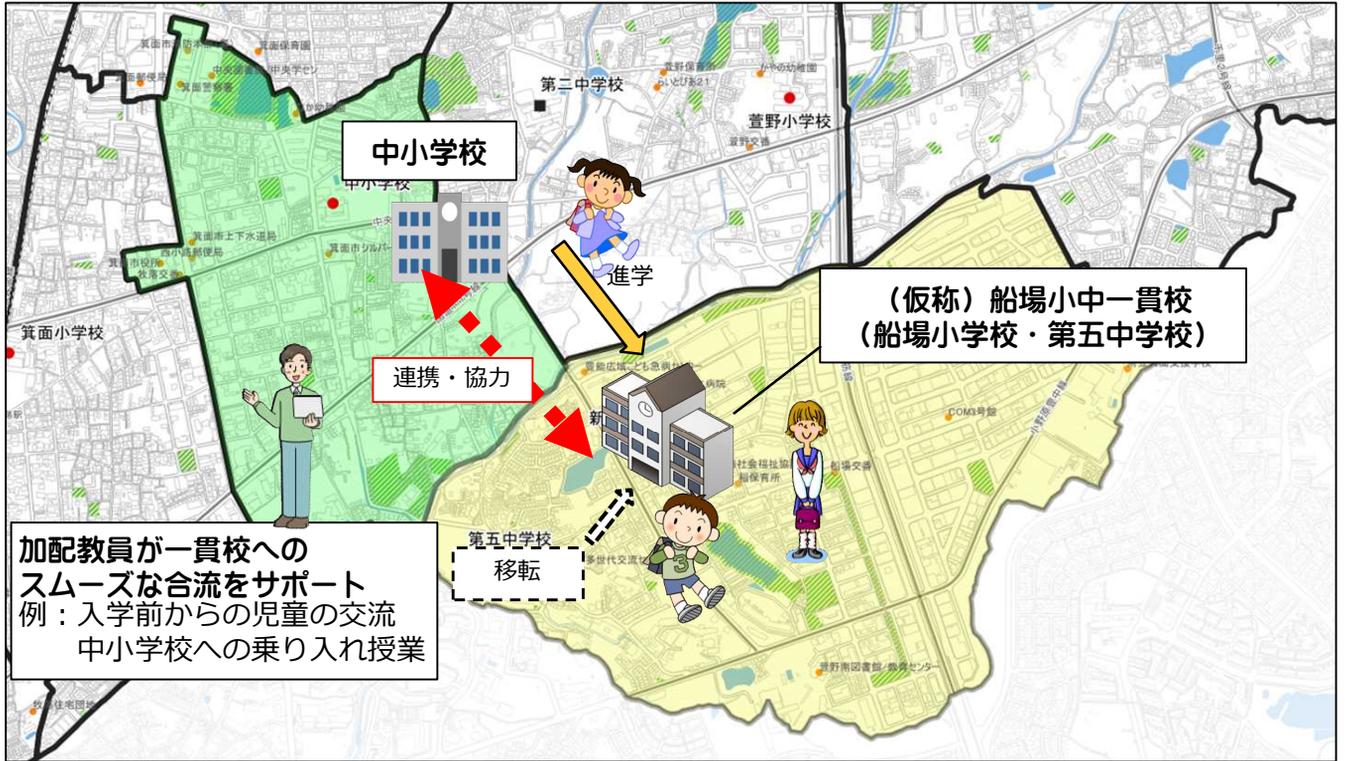
子どもたちの教育環境にできるだけ差を作らないという観点から、小・中の組み合わせは、最大でも現行の「3小1中」(※)までに収めるのが適切と考え、**新設校を小学校と決定しました。**

※第二中学校区は、現在も「3小1中」の組み合わせです。

2. 事務局検討案

(案1) 中小・船場小・五中の一貫教育校

- 五中を船場に移転し、新設小学校とあわせた施設一体型小中一貫校とする。
- 中小の卒業生は、船場小中一貫校に進学(移転後の第五中学校)。中小・船場小・五中の3校で一貫教育を進める。
- 進学時のスムーズな合流をサポートするための加配教員を配置する。



【主なメリット】

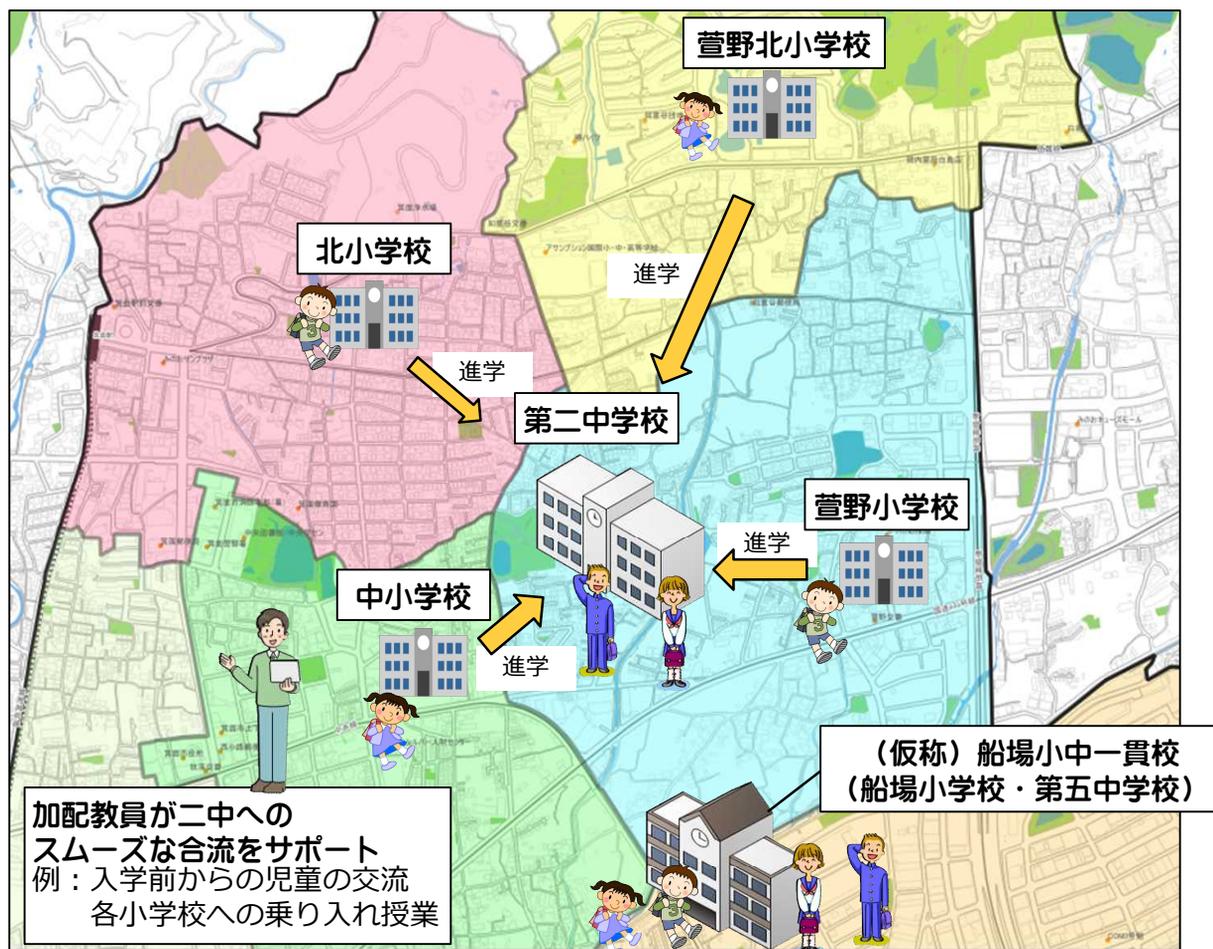
- 施設一体型のメリット（異学年交流・教職員の資質向上など）がありつつ、一貫校の課題である「人間関係の固定化」「進学経験が積めない」が解消された学校となる。
- 施設一体型と施設分離型の両方の小中一貫教育を実践する学校なので、この学校で得た小中一貫教育に関するノウハウを全市的に波及させられる可能性がある。

【主なデメリット】

- 中小学校児童にとっては中学生から船場校舎に合流するため、船場小の児童よりも進学に不安を感じる可能性がある。

(案2) 二中を4小1中とし一貫教育の教員を加配

- 五中を船場に移転し、新設小学校とあわせた施設一体型小中一貫校とする。
- 中小の卒業生は二中に進学する(二中校区は4小1中となる)。
- 進学時のスムーズな合流をサポートするための加配教員を配置する。



【主なメリット】

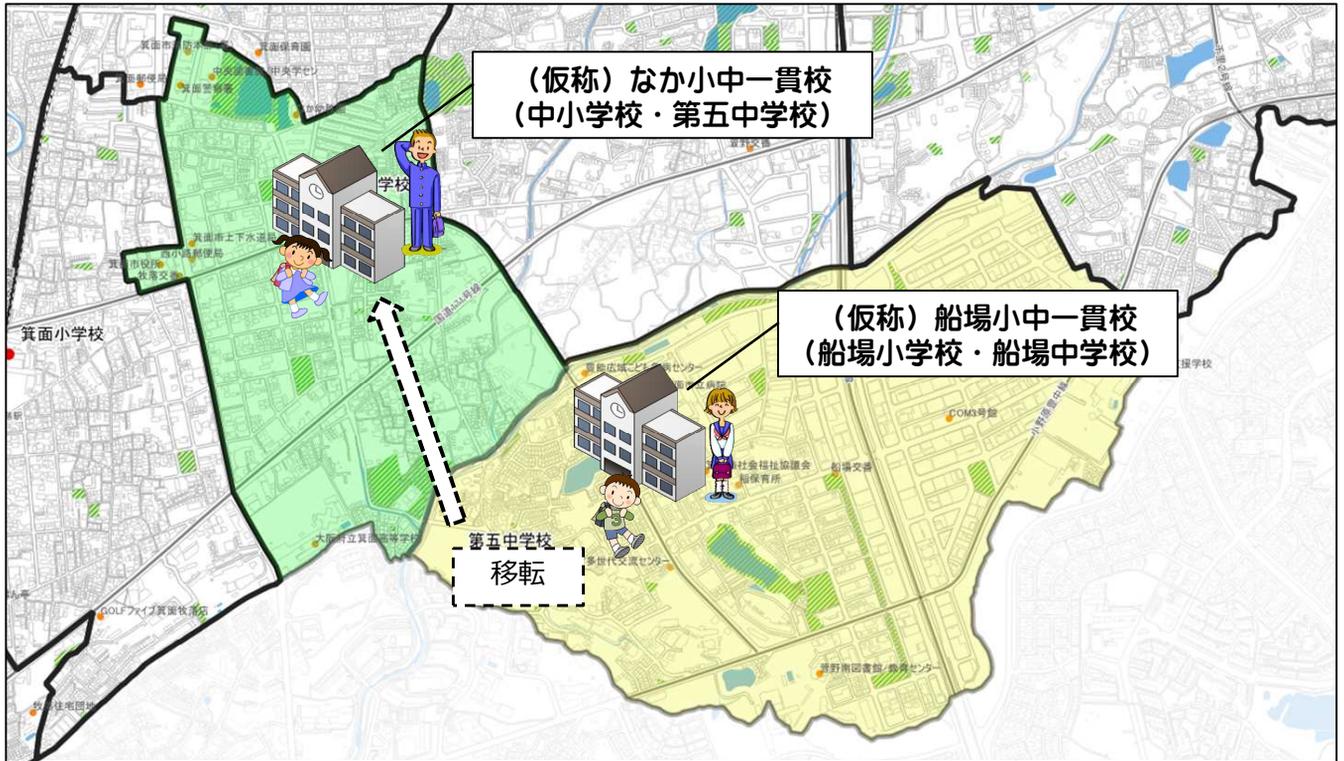
- 4つの小学校から進学してくるため、様々なベースの子どもが集まり、様々な価値観が生まれる学校となる可能性がある。

【主なデメリット】

- 4つの小学校から進学してくるため、入学時の人間関係作りに時間がかかりやすい（現状よりも中1ギャップが大きくなる）。
- 4小1中のため、小中連携が進みづらい（課題としていた4小1中の状態自体は解消されていない）。

(案3) 中小にも小中一貫校をつくる

- 船場に小学校と中学校を新設し、施設一体型小中一貫校とする。
- 五中を中小校舎に移転し、中小でも施設一体型小中一貫校をつくる。



【主なメリット】

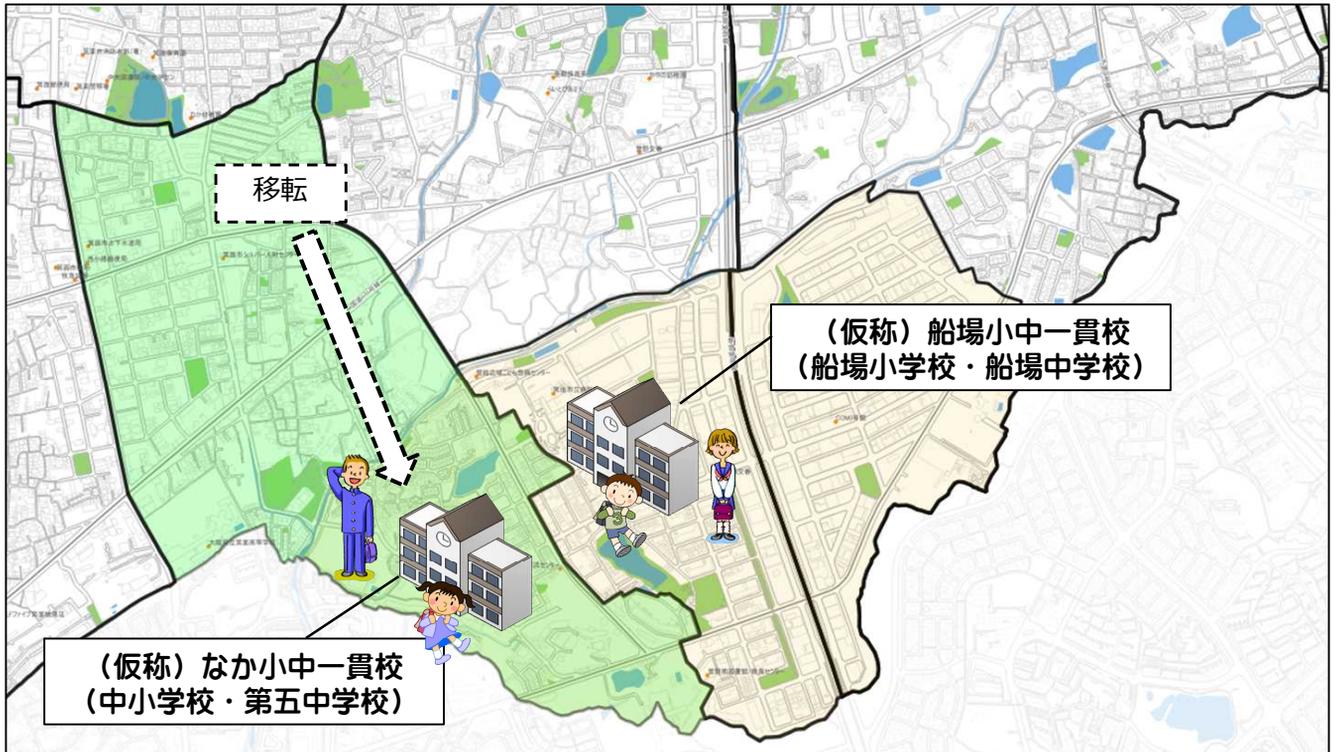
- 市内の小中一貫校が増えるため、全市的にさらに小中一貫教育が進む。
- 中小と船場小との間に、一貫教育に関しての差が生まれない。

【主なデメリット】

- 案1.2と比べ、設置する中学校が1校増えることになるため、初期費用・維持費が高額になる。
- 中小学校は敷地が狭く、運動場などの施設が十分に確保できない。

(案4) 五中にも小中一貫校を作る

- 船場に小学校と中学校を新設し、施設一体型小中一貫校とする。
- 中小を五中校舎に移転し、五中でも施設一体型小中一貫校をつくる。
- この場合の五中一貫校の校区は、今日時点の校区割りを採用する。



【主なメリット】

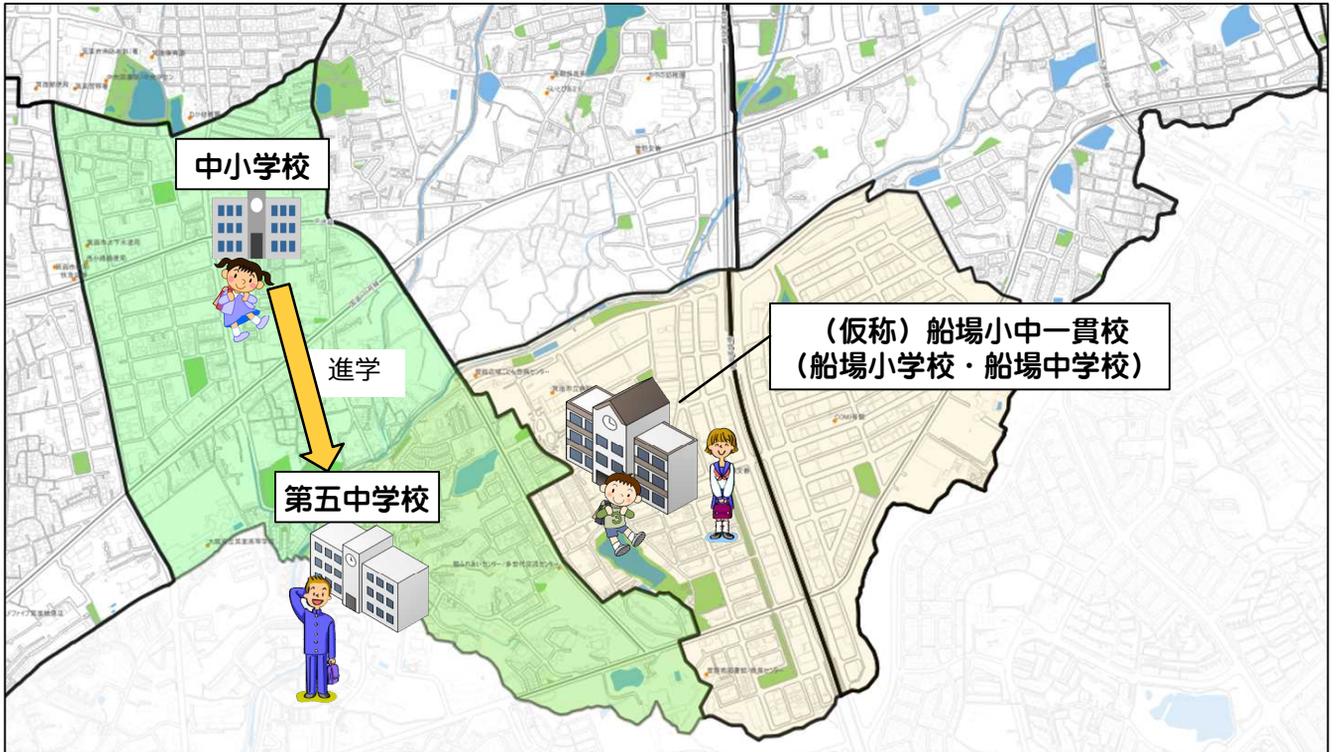
- 市内の小中一貫校が増えるため、全市的にさらに小中一貫教育が進む。
- 中小と船場小との間に、一貫教育に関する差が生まれない。

【主なデメリット】

- 前回の校区再編では「小学生の通学距離1km圏内」を目安に校区を決定したが、この案では、小学生の通学距離が1kmを超える地域が新たに発生する（「小学生の通学距離1km圏内」が達成できず、通学の安全上の不安がある）。
- 案1.2と比べ、設置する中学校が1校増えることになるため、初期費用・維持費が高額になる。
- 第五中学校でも敷地が十分ではなく、運動場などの施設が十分に確保できない。

(案5) 船場に施設一体型小中一貫校をつくり、中小・五中はそのまま

- 船場に小学校と中学校を新設し、施設一体型小中一貫校とする。
- 中小、五中はそのままの位置で存続し、中小卒業後は五中に進学する。
- この場合の中小・五中校区は、今日時点の校区割りを採用する。



【主なメリット】

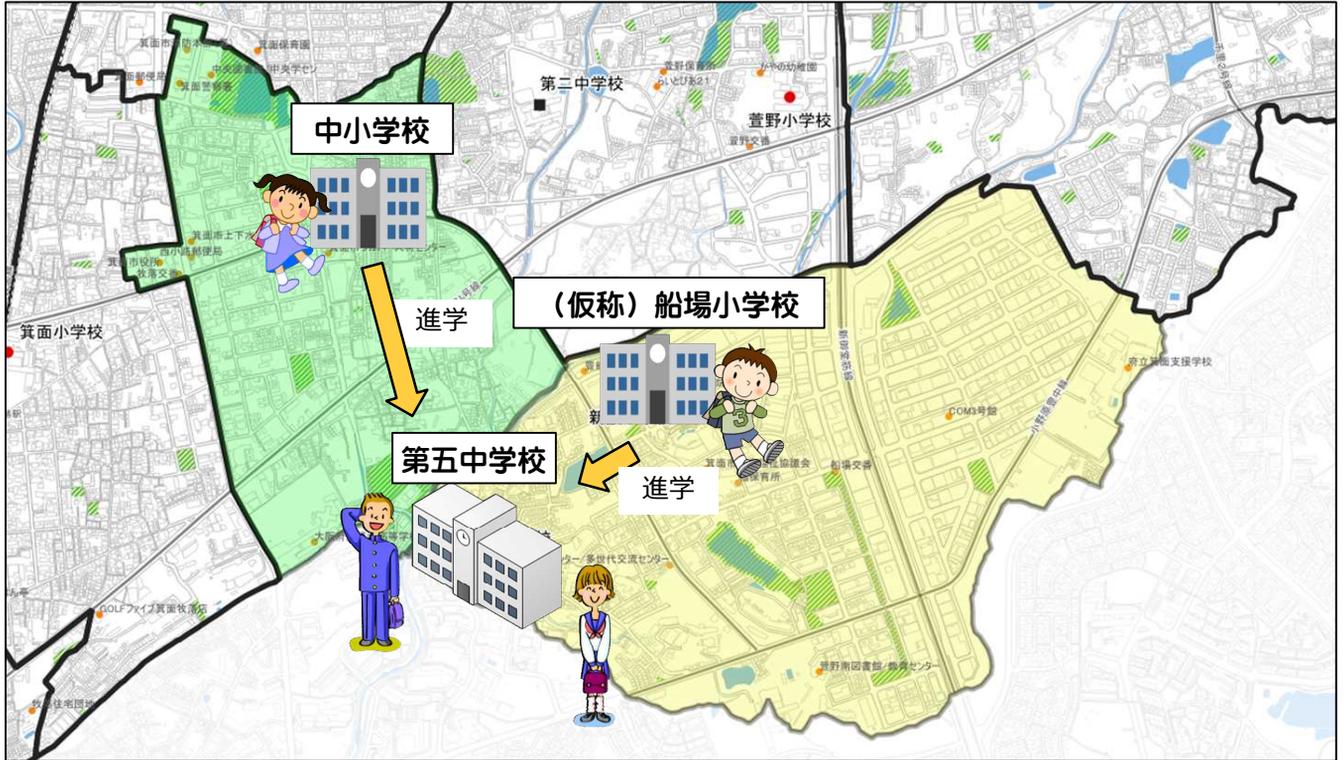
- 船場中校区、五中校区が1小1中となるため、中学校区での小中連携がやりやすい。

【主なデメリット】

- 前回の校区再編では「小学生の通学距離1km圏内」を目安に校区を決定したが、この案では中小学校に通う小学生の通学距離が短くならない（「小学生の通学距離1km圏内」が達成できず、通学の安全上の不安がある）。
- 案1.2と比べ、設置する中学校が1校増えることになるため、初期費用・維持費が高額になる。

(案6) 船場に小学校を新設する (現行案)

- 船場に小学校を新設する。
- 中小、船場小の卒業生は五中に進学する。



【主なメリット】

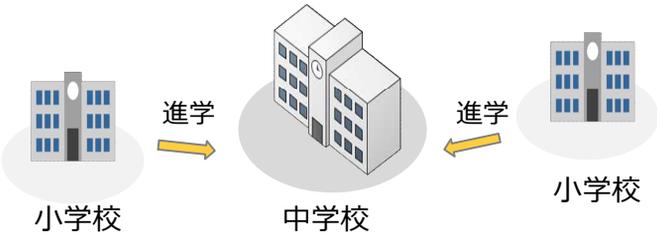
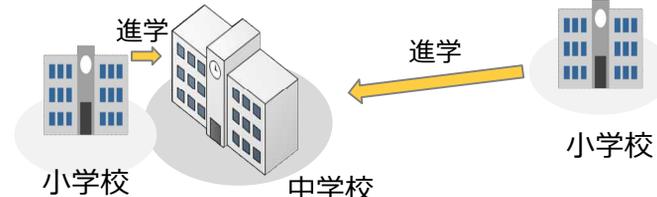
- 一般的な中学校区の形であり、過去に決定済みの内容でもあるので、児童・保護者・地域にとって混乱が生じづらい。

【主なデメリット】

- 施設一体型小中一貫校自体の有用性が評価されている中、新たにつくる学校を施設一体型小中一貫校にしないことは、今後の教育を考える上でも市としてのデメリットが大きい（学校新設や統廃合のタイミングでしか施設一体型にすることはできない）。

※第三者評価では、施設一体型小中一貫校自体の有用性として、児童生徒に与えるプラスの影響、教員に与えるプラスの影響、保護者に与えるプラスの影響について指摘されました。ただし、一度決定したことを再検討することに対する説明責任や、再検討の結果が船場地区だけにプラスに働くことの懸念についても同時に指摘がありました。

参考：小中一貫教育を進める上での施設分類

| 分類 | 説明 | 事例（今日時点） |
|-------|---|--|
| 施設一体型 | <p>小学校と中学校が同じ施設</p>  | <ul style="list-style-type: none"> とどろみの森学園 彩都の丘学園 |
| 施設分離型 | <p>小学校と中学校が別々の施設</p>  | <ul style="list-style-type: none"> 二中校区（3小1中） 五中校区（2小1中） |
| その他 | <p>小学校と中学校は別々だが、1つの小学校が中学校に隣接している施設</p>  | <ul style="list-style-type: none"> 一中校区（2小1中） 三中校区（2小1中） 四中校区（2小1中） 六中校区（2小1中） |

※文部科学省「小中一貫教育等についての実態調査の結果」を参考にした分類